

大学における定期検診のあり方について

金沢大学保健管理センター所長 村 沢 健 介

昭和50年4月平松教授の後任として、金沢大学保健管理センターをおひきうけしまして、早くも4カ年すぎました。私は金大結研附病、引き継ぎ同大がん研附病で肺外科を専攻し、かたわら成人病管理の一環としての成人病検診にたずさわってきました。以下大学における定期検診のあり方について、感じたことを述べてみたいと思います。

かつて、猖獗をきわめ、亡国病としておそれられた肺結核が近年では患者数も減少し、更に死亡率が激減しました原因は抗結核剤の出現と適切なる治療及びBCG予防接種等による公衆衛生学的保健管理の徹底によることもさることながら、先人の「くるのをまたず、患者を探だすべきだ」と機動性を利用して行なわれた肺結核集団検診の果たした役割をみのがすことは出来ません。最近では肺結核症の減少とは裏腹に成人病疾患の増加、死亡率の上昇が目立ってきました。即ち、死亡率の推移をみましても、成人病中の三大疾患であります、脳血管疾患は昭和26年来第1位、悪性新生物は昭和28年来第2位、更に心疾患は昭和33年来第3位を占め、その順位は今まで変わっていないことでも明白であります。年令別に死亡率の順位をみると、家庭的にも、或いは社会的に最も必要な世代である35～69才代に、女性では30才代より、第1位は悪性新生物、第2位は脳血管疾患、第3位は心疾患であります。世界各国に比べ、我が国では特に、男女共に胃がんが多く、その死亡率は40～50才代では悪性新生物の1/3を占めるに至っております。従いまして、肺結核の制圧に大きな役割を果たした肺結核集団検診の実績を踏まえて、始められました成人病検診の主目的はがん対策がありました。

私は昭和36年より成人病検診に参加しておりますが、当初より“がん”集検では、胃及び肺は間接X線撮影で、子宮がんは細胞診で、乳がんは解説と一部では間接X線撮影との併用により検索、これに平行して、循環器集検では高血圧疾病を中心にして、血圧測定、尿検査、必要に応じて心電図検査等が、地域或いは職域に出張してスクリーニング形式で行なわれてきました。その後、X線装置の改善或いは改良されました内視鏡の導入による胃集団検診方法の進歩発達は胃早期がんの発見率の向上をもたらし、遂に近年に至り40～50才代の胃がん死亡率減少のひきがね的役割を果たすに至っております。而し、一方、循環器疾患では、患者数のますますの増加、或いは死亡率の上昇、又職場或いは公害による難治性慢性呼吸器疾病患者数並びに死亡率の漸増は成人病全般に関する啓蒙教育とあいまって、世相の要望を高め、糖尿病は勿論のこと、成人病でも稍もすると等外視されがちであった腎、肝、及び肺疾患等をも含めた広範な成人病関連疾病についての集団検診が行なわれるようになり、疾病的早期発見、早期治療と成人病検診の本来の目的に、更に経過観察、予防並びに疾病的管理指導等が追加され、その意義の拡大をもたらしました。従いまして、最近の成人病

検診には従来の地域或いは職域における出張検診の外に、施設を利用しての集団を対象とした健康増進を含めての多角的外来集検方式、或いは個人に対しては、入院して行なわれる従来の人間『ドッグ』方式が採用される等、検査目的により実施方法の選択が出来る一貫した流れ『システム』方式を確立するに至りました。

集団検診の実施にあたり最も重要なことは 1) 対象集団を能率よく短時間に処理すること 2) 対象個人に検査による苦痛を与えないこと 3) 精度の高い診断が望まれ、抽出疾患者の事後管理に万全を期すこと 4) 経済的であること 等があげられます。1)及び2)は実施方法、手技の改善により効率よく適確になりつつありますが、3)の精度の高い診断能力を短時間に発揮するためには、機械的処理が多くなり、4)の経済的とゆう面に反します。以上の諸点は大学における定検実施に際してもあてはまります。ただ大学生を対象とした場合、成人病検診と異なる面は事後管理の点であります。即ち、抽出されました要治療群学生の処置は専門機関に依託するとしましても、治療を要しない要経過観察学生或いは所謂半健康学生が一般学生と同様に、大学教育により専門的知識を習得し、人格的にも淘汰され、終業後社会的にも普通に、活躍される状態におかれることであります。大学において学生の健康管理の掌にあたる保健管理センターの指導的役割は大きいのであります。

ここで、定検の利点をまとめますと、 1) 訴へ学生は勿論のこと、特別に自覚症状なき、所謂健康学生から疾病の早期発見が出ることであります。これは早期治療につながり、治療期間の短縮は学業或いは社会への復帰を早め、一方では治療費の軽減をもたらします。遂年検診への参加は疾患の予防、既応疾患の経過観察等個人の健康管理を容易にし、かっては大学生における肺結核患者の激減をもたらし、最近では若年層における急性或いは慢性疾患、特に腎炎、高血圧症更に糖尿病症例等の抽出、治療或いは経過観察に役立っております。一方、精神的方面では社会構成の複雑化が学生生活にも大きく影響し、増加の傾向を示している精神的半健康状態から精神的疾患への病状悪化の防止に早期発見による早期処置が非常に役立っている報告も少なくないのであります。2)は保健管理に関する教育の充実は学生個人は言うに及ばず、ひいては大学における公衆衛生学的保健管理に役立ちます。 3)は定検の実施により大学生の保健管理面或いは疾患の実態把握が可能となり、この方面での教育研究が更に充実し、各大学の報告集計は大学における地域疫学的面での大きな参考資料となりましょう。

而し、定検実施に際しての欠点も少なくありません。 1) 定検が毎年行なわれるための『マンネリズム』化による遂年受診学生数の低下と実施者の安易感から生ずる『手ぬき』現象であります。特に後者は厳に戒められねばなりません。 2)は要精検学生抽出時の『みのがし』と『みすごし』の問題であります。前者を少なくするために、後者がふえる。又、逆の場合も考えられます。定検実施後の精検をたのみにしての、不用意の判定結果は受診学生の定検に関する信用度を疑わせ、ひいては未受診学生增加のひきがねともなりかねません。所謂健康学生の多い大学における定検に特

に慎重を要する大きな問題と考えております。3)は定検『ノイローゼ』或いは心身症の併発であります。これ等の症状には多分に医原による所見が少なくありません。定検時或いは実施後の適切なる指導管理はそれ等を防止できるであります。

平松前所長或いは諸大学の報告によりますと、大学生の休・退学者の半数以上は精神的疾患によるとされています。従来臨床医であった私はその実態におどろきました。現在の世相の影響は大学生に、不安・不信、更に危機感を抱かせ、精神的或いは心理面での未解決問題をますます派生するでしょう。今後の大学における学生の保健管理には、身体的にはもとより、精神的にも、宮田教授の健康度図における増健、護健或いは復健の線にそっての適確なる保健管理指導と教育の徹底は半健康学生より健康学生への脱皮を早期にうながすことが出きるでしょう。

以上定検の利点と欠点を述べました。定検受診学生に、その目的と意義を熟知させ、実施面での信用を高めることは受診率の向上につながります。又、定検実施後の適切なる指導管理は精検受診例数をふやし、ひいては受診率の向上につながるものと考えております。従いまして、上記に述べました様に、現在の保健管理センターに、定検より精検まで一貫して実施出きる諸設備及び人員の充実は、定検より精検まで、同じ場所で同じ職員があたるとゆう安堵感を受診学生にあたえる意味においても、早急にのぞまれてやみません。

主な参考文献

全国大学保健管理協会誌 第15号 (51.3)

国民衛生の動向 財団法人厚生統計協会 25巻9号(53年特集号)

岐阜県神岡町成人病検診10年間のあゆみ 村沢健介(1972年)

金沢大学保健管理センター報告 第6号

昭和54年3月発行

編集発行者 金沢大学保健管理センター

金沢市丸の内1番1号

(電 62-4281 内線289)

印刷所 兼六孔版社